

ハノーファーとハンブルク

鎌倉市 長堀 優

ハンブルクで開かれた国際外科学会義での発表のため、初秋のドイツを訪れました。まず9月2日夜、そば降る秋雨のなか、かつての留学の地、ハノーファーに到着しました。空港では、研究室の友人と、今回のホームステイ先のケラー氏が迎えてくれました。ハノーファーは4回目の訪問となりますが、今年は万博が開かれており、テレビ塔がライトアップされるなど町にはいつもと違う雰囲気がありました。翌日、大学の友人たちから情報を集めて、早速万博会場へ足を運んでみました。砂漠を再現したUAEのように工夫した展示館もあったものの、万博のテーマである“環境”にこだわった日本館などは、どうしても固い雰囲気が否めず、全体的には、地味な印象でした。巷間指摘されているように、インターネットの普及目覚ましい昨今、万博の存在意義が怪しくなっていることは確かなようです。次の愛知が心配です。5日は、教授と一緒に、彼の生まれ故郷であるリュネブルクへのドライブへいきました。Heide（荒野）を覆い尽くしていた可憐で健気なユリカに強く胸を打たれました。翌6日、研究室の皆に再会を約束し、ハンブルクへと出発しました。初めて訪れたハンブルクにはあらゆるエンターティメントが溢れており、ショッピング街の規模もハノーファーとは比較にならず、驚くとともに、それまで北ドイツに対して抱いていた穏かなイメージが一変しました。学会のレセプションで訪れた市庁舎の大会議室は、4・5階建てのビル位の高さであろうかと思われる四方の壁面が巨大な絵画、金箔で覆われており、その豪華絢爛さに、ただただ圧倒されました。ドイツ文化の奥深さをまざまざと見せ付けられた感じがしました。他にも、大道芸の達人によるヴァリエッタ等を大いに楽しむことができ、大満足でした。学会も首尾よくおわり、充実感とともに、帰路に着きました。

湘南日独協会 2001 年度活動予定

■4月28日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■5月26日(土) 14:00～16:00

演奏会 「ドイツ歌曲の午後」

演奏 梶井龍太郎・梶井智子

会場 鎌倉商工会議所地階ホール

■6月23日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■7月28日(土) 「ドイツフェア」 18:30～

会場 湘南ホテル

■8月25日(土) 会員懇話会 18:00～

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F ローズルーム

■ワイマールからお客様が湘南に！

ワイマール独日協会の一行が4月下旬に来日され、湘南地方には3日間滞在する予定です。湘南日独協会として歓迎会を行います。多数のご参加をお願いします。詳細は追ってお知らせします。

■東京ドイツ村が3月8日にオープン！

アメニティパーク「東京ドイツ村」が千葉県袖ヶ浦市に誕生しました。27万坪の雄大なカントリーファームです。入園料は大人1,200円、子供800円。

■事務局の運営にご協力を！

事務局では郵便発送や名簿整理のご協力下さる方を探しています。お心当たりの方は事務局まで。

湘南日独協会会報 (Der Wind)

VOL 3 . NO. 2 . 通巻14. 発行 2001.3.24.

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局：〒251-0055 藤沢市南藤沢 8-9 中丸ビル 2F

TEL0466-26-3028 / FAX0466-27-5091

No. 14.

湘南日独協会 会報

Der Wind

(風)

湘南日独協会 第14回例会

講演会

演題 「幕末日独交流史余聞

——シュネル兄弟の事績」

講師からのメッセージ

開国が攘夷かで揺れる物情騒然とした幕末の日本に、十代の若さで北ドイツ・プロイセンからやって来た風雲児がいた。兄 Henry 弟 Edward の Schnell 兄弟である。時代は急転し、倒幕か佐幕か、日本を東西に分けての戊辰戦争へと突入していく。その渦中に在って、会津・長岡・米沢・庄内ら西軍に抵抗する奥羽越諸藩に武器を供給するばかりか、自らも戦闘に参加した破天荒な快男児の足跡を辿ってみよう。その名の如く Schnellfeuerkanone (速射砲) 宛らに日本を駆け抜け、幕末史の一隅に異彩を放った紅毛碧眼ドイツ侍の浪漫。

講師 廣川貴男氏(湘南日独協会会員)

日時 3月24日(土) 13:30～15:30

会場 ホテル法華クラブ藤沢 2F

ロータスホール

「近代のドイツ精神史 および 文化史における日本」

※前号からの続き……

このことから分かるように、船の乗組員は社会の最下層の人達ではなく中流の人々だったのです。たとえば、ペーター・ハルツィングという人はケルン近隣の小村出身ですが、家光の頃平戸に来て、日本婦人と結婚し、2人の子供を設け、その子供達はドイツで教育を受け、後に風力エネルギー利用に関してライブニッツと論争するほど高い地位を得たという例もあります。

その他にも、カスパー・シャンベルガーといった外科医など高い教養を持った人達が日本を訪れ、日本に大きな影響を与えると同時に帰国してから見聞録を書いた。これらの見聞録やイエズス会の年報などを参考にして、1649年初めて日本に関する学問的な本がラテン語で出版されました。この本はヨーロッパでは地理学の古典として現在もなお高く評価されています。

このように、実際にヨーロッパの多くの人間が日本を訪れ、多くの情報を持ち帰ったにもかかわらず、ヨーロッパ人の頭の中には独自に創り上げられた日本のイメージが勝手に育っていきました。それは往々にしてヨーロッパ人の自己認識によって左右されるもので、客観的な日本のイメージではなく、いつまでもヨーロッパ人のバイアスが入っていて、日本が変わっていても、そのイメージは変わらない、あるいは、日本は変わらなくても、イメージだけが変わっていくといったことが、近世になってからも二、三回繰り返されています。

先にお話ししましたように、イエズス会が説教の



テーマにしたり、演劇に採り入れたりして、日本のイメージは最初は非常にポジティブでした。当時、日本ではカトリック教徒は迫害されて大勢の信徒が殺されたのですが、その事実をネガティブに見ないで、そのような死を通じて教会が勝利を収めたと解釈したのです。イエズス会演劇の中で170のドラマが日本を題材にしています。代表的な例が高山右近、大友宗隣、細川ガラシャ夫人などで、いずれもポジティブなイメージで捉えています。

それに加えて、当時は、日本の工芸品が大量にヨーロッパに流れ込みました。最初に来たのは漆です。ご存じの通り、ヨーロッパでは漆のことをジャポンと呼んでいます。ほぼ同じ頃着物が入ってきます。ヨーロッパ人が初めて着物を見たのは天正少年使節団がリスボンに上陸したときで、その時リスボン枢機卿のお姉さんが自分の子供のために日本に着物を注文した記録が残っています。また、1615年の伊達使節団の支倉常長がローマに入城するときには、当時日本でも既に使われていなかった室町時代の能衣装を身につけて入城した様子が油絵として残っていて、今でもローマに展示されています。ケンペル（日本誌）によりますと元禄の初め、江戸幕府に参内したオランダ人は、將軍を始め、各大名やその通訳の人々から190着もの着物を贈り物として貰ったと云うことで

す。それを長崎に持って帰る。そして、オランダ人の目で見ると一番美しく見える着物は長崎代官にお土産として献上し（今だったら賄賂ですね）、二番目に美しいのはバタビア総督に、三番目に美しいのはアムステルダム東インド会社の社長に贈り、四番目に美しい着物をようやくオランダの王様に差し上げると云った状況でした。これらの着物のいくつかはまだ現物が残っています。当時はベルギーとオランダは一つの国でしたからブリュッセルで作られるレースを着物につけて、オランダの王様は大いにくつろいだのです。あるヨーロッパ生活史の研究者はヨーロッパ人がくつろいだとき着るガウンの起源はここにあると述べています。着物はすぐにオランダの王様だけでなく大臣や資産階級の人達にも広がっていききました。しかし、あまりに高価なので、東インド会社は一計を案じ、人件費の安いインドに大量生産させて、ヨーロッパで売ろうと考えました（今もいろんな国が同じことをしていますね）。アムステルダムの当時の帳簿を調べるとder echte japanische Rockとder indische japanische Rockという言葉があります。前者が本当の日本製で高価な着物、後者がインド製で廉価な着物です。インド製のものは大学教授や学生が手に入れられるくらいの値段だったようです。1730年オランダのライデン市長はライデン大学100周年の記念ミサに日本の着物ではなくヨーロッパのフロックを着てくるようにわざわざお触れを出したほど流行ったのです。ひょっとしたらモーツァルトもくつろいだときインド製の着物を着ていたのかも知れませんね。……※以下次号

★湘南日独協会のドイツ旅行★

5月22日(火)成田発ベルリン着。ベルリン、ポツダム、ライプツィヒ観光。24・25日ワイマールで独日協会行事に参加・観光。その後はエアフルト、アイゼナッハ、ハイデルベルグ、ローテンプルグ、ノイシュヴァンシュタイン等観光。30日帰国。詳細は湘南日独協会事務局へお問い合わせ下さい。